

## 世界の創造の思想

カール・ヤスパース (著)

岡田 聡 (訳)

リグ・ヴェーダのある賛歌において<sup>訳註1</sup>、紀元前の千年間にインドで、世界の根源<sup>訳註2</sup>について、詩人が問う。以前には何が存在したのか。有ではなく、無ではなく、天ではなく、空界ではなく、死ではなく、不死ではなく……、<sup>ダス・アイネ</sup>一なるものだけが呼吸すると、詩人は言う。それのほかに、別のものは存在しなかった。それに世界は由来した……。しかしと、詩人はすぐに問う。どこに世界が由来したのかを、だれがいったい実際に知っているのか。神々はかの遠くには到達しないと、詩人は言う。世界が、創造されているのか、創造されていないのかを、だれが知っているのか。答えはこうである。すなわち、そのことを知っているのは、彼、すなわち、<sup>デア・アイネ</sup>一者、一切の観察者だけである、——<sup>オーダー・ヴァイス・アウホ・エア・エス・ニヒト?</sup>あるいは、彼も知らないのか。

それゆえ、さらに神々を超えて、詩人は問う。詩人は、究極的なもの、すなわち、一者に、いたり、それを一切の監視者や支配者と呼ぶ。一切の監視者や支配者もそのことを知らないのか、そのような問いは、流神になるほどに懐疑的であるように思われる。しかし、そのような問いは、実際にそうであろうか。「以前」についての問いが、真剣に立てられているならば、まなざしが、謎へと注がれたならば、一切を包括するものや無限なものに直面し、いかなる発言もふさわしくない。思考は問いつつ立ち止まる。思考は存在に直面し立ち尽くす。知識だと勘違いされたものによって、また、存在が、私たちが知識と呼ぶものの形式によって、そもそも知られうるという、期待によっても、存在は、手を

つけられるべきではない。<sup>オーダー・ヴァイス・アウホ・エア・エス・ニヒト?</sup>あるいは、彼も知らないのか、という問いは、本来的ウンザーク・パールカイトなものヴィッセンス・フレムト・ハイトの言語化不可能性や、あらゆる特定の知識を踏み越え対象をもたない根本知の知識との無縁さを、隠し持つ。

そのような経験は、三千年前に存在した。私たちは、先に進んだのか。私たちは、こんにち、世界の根源について、より多くを知っているのか。三千年来、多くの答えが存在した。見てみよう。

太古のコスモゴニー（世界の発生の教説）がある。世界の発生は、以下のものとして表象される。すなわち、性的な分離と合一による生殖。原始卵からの訳註、水からの、成長の根源。さらについて、建築物を創り出す建築家のような、世界を創り出す始祖による製作。さらに最後に、意識がないものからの意識があるものの、一元性からの二元性の、思考されえないものからの思考されるものの、生成。見られないものと聞かれないものからの力と名の出現。相互の対立と再度の合一の過程。繰り返し、世界の発生が表象されるさい、世界における事象を手がかりに、生命的、物質的、精神的、論理的な事象として、世界の発生が、思考される。

非常に崇高なものにまでいたる、あらゆるこれらの表象には、以下の一つのことを、共通している。すなわち、人は、それらが述べられるとき、事態がどのように成ったのかを、知っているように思われる。人は様々な力や神、実体、カテゴリーをあつかうが、それらの由来についてさらには問われない。リグ・ヴェーダの詩人が主張したような謎は、<sup>ベシヤイト・ヴィッセン</sup>情報としての知識においては、失われている。問いは、謎に直面して立ち止まらず、<sup>グダンゲンローズ</sup>答えにおいてむしろ軽率に終わる。

あらゆるこれらの神話的なコスモゴニーを超えて、より真の答えは、無からの創造の思想においてあるように思われる。この創造は、表象されえず、すなわち、世界における類比によっては具体的に説明されえない。それは、もはや時間的な事象ですらない。というのは、創造によって、時間も初めて、創造さ

れたからである。世界の創造は、それ自体、世界の一部である時間性から、取り去られる。

この思想の、二つの史実的な例が、存在する。

第一の例は、聖書の創造の思想である。神は、世界を、無から創造したのであり、世界における事象を手がかりに世界を超えてあるものを理解させようとする方法のいずれかによって創造したのではない。しかし、この思想も、とにかく思考されたものであるから、思考を立ち止まらせない。思考は、いったい、どこに神は由来するのかと、さらに問う。思考はやはりなにものでもありえないであろう。リグ・ヴェーダの詩人のように、カントは謎に直面する。「人は、あらゆるありうるものなかで、最高者として表象する存在が、いわば自己自身に、以下のように述べるという思想を、抑えることはできないが、耐えることもできない。——私は、永遠から永遠へと存在する。私のほかには、私の意志によってのみなにものかであるものをのぞけば、なにものも存在しない。しかし、いったい、どこに私は由来するのか」<sup>註4</sup>。

第二の例は、以下のインドの思想である。すなわち、世界は、それ自体において根拠づけられた現実ではなく、マヤー、つまり幻影である。世界は、確かに、私たちの現存在にとっては事<sup>レアリテート</sup>実であるが、しかし、この現存在とともに、まやかしによって、現実的なものを覆い隠す。世界の創造は、この非存在が、存在という<sup>シャイン</sup>仮象による誘惑において、閃くことである。しかし、どこに幻影は由来するのか。だれが幻影を惹起するのか。同様に根源は問いから逃れる。結末は、ここでも、私たちにめまいをさせる問いが直面する深淵である。

世界の発生についてのあらゆる問いには、全く別の答えが対じする。問いは誤って立てられている、というのは、世界は永遠であり、ほかのものにもとづかず、それ自体、すべてであるからと。

この答えも、偉大な歴史的形姿において、存在する。

この答えは、中国において、疑いもなく自明である。世界は、永遠から「永

遠へと] 存在し、天体運行と生命の周期において、つねに同一の世界である。世界は、タオの、すなわち、静かに強<sup>ユーパーメヒティヒ</sup>力に、しかし自然<sup>グヴァルトロース</sup>に作用するものの、秩序によって、導かれている。逸脱によって、秩序は、一瞬は、破壊<sup>ツェアシュテアート</sup>されるが、しかし、決して破壊<sup>フエアニヒテット</sup>しつくされず、絶えず回復させられる。

インドと西洋において、多くの思想家によって、世界の発生と世界の消滅が思考された。しかし、様々な世界が生成し消失するとしても、彼らにとって、やはり、世界の存在は永遠である。一つの世界は発生し崩壊するが、崩落から、すぐさま、新しい発生が生じる。世界<sup>デー・ヴェルト</sup>は、様々な世界の永遠の回帰の過程として、世界の循環において、永遠である。

多くの偉大な歴史的形姿の一つの実例は、ヘラクレイトスの言葉である。「この世界を創造したのは、神でもなく、人間のだれかでもなく、この世界は、かつて、いまも、これからも、つねに生きている火であり、定量だけ燃えて、定量だけ消える」<sup>訳註5</sup>。

中国やインド、西洋の、そのような思想においては、世界は、それ自体、神的存在であるか、神である。神々は、世界において、すなわち、世界の循環において、発生し、それ自体、変化に隷属している。

\*

世界の発生についての問いに対して、伝えられた答えは、謎を表明するための、たんなる戯れであった。さもなければ、答えは、誤った知識になり、謎がその知識において失われたか、問いは、世界の永遠性の主張によって、断ち切られた。

しかし、こんにちの物理学は、強制的な認識によって、謎を暴いた [のではない] のか。

私たちは、物理学者たちから、宇宙<sup>ヴェルトアル</sup>の歴史を聞き知る。原始の爆発から、

過程が開始した。その過程は、星雲が互いに離れていこうとすることにおいて、こんにち、天文学者たちには、なおも絶えず膨張する宇宙<sup>アール</sup>として示される。そのことや、くわえて、研究者たちの実際の所見を、聞き知る者は、このいまや大まかに知られた宇宙<sup>コスモス</sup>に直面し、呆然と立ち尽くし、いまや人は由来を知っているのだと、思うかもしれない。測定と数学が支配するところでは、現代の人間は隷属しがちである。

しかしながら、個々の所見の正確さにもかかわらず、話は、世界全体の由来や総体的な内容についての主張にいたるところでは、おかしくなる。推論されたものが、経験されうるものになることなく、推論によって、経験されうるものの領域が、超え出られるところでは、人は、偽りのものに陥るであろう。数学的な可能性の構想は、形而上学のかつての概念的な可能性の構想と同様に、欺瞞的な思弁であり、また、誘惑的なものである。

決定的であるのは、容易には把握されえない以下の事態である。すなわち、第一に、カントは、世界の全体は決して対象になりえないということを、把握した。私たちは、世界においてあり、決して全体としての世界に対して立たない。私たちは、全体としての世界を把握しようとするならば、二律背反に、すなわち、矛盾に、陥る。矛盾の肯定命題<sup>テーゼ</sup>と否定命題<sup>アンティテーゼ</sup>の両者は、同時に、人が抽象的にだけ思考するならば、証明可能なように見え、経験が尋問されるならば、解決不能なように見える<sup>シャイネン</sup>。

第二に、世界は、そのような認識においては必然的に生命のないものとして思考される天文学的な宇宙にすぎないものではない。天文学的な宇宙は、数学的な抽象化によって、測定による証明可能性の程度に応じ、認識されるようなものである。生命が存在するということや、私たち人間が存在するということが、意識が生じ、この意識にとって、これらのすべてが、予見不可能なものまで、認識されうるようになるということは、かつて「も」原子の動きの機序にもとづいては、把握されえなかったように、こんにち純粹に数学的に認識される世

界にもとづいては、把握されえない。認識されうる宇宙にもとづいては、その宇宙を認識する思考の由来は、把握されえない。

\*

結論は簡潔に言えば、以下である。すなわち、私たちは、全体としての世界を、私たちの認識の対象としては、獲得することができない。私たちは、つねにそれにおいてありつづける。しかし、私たちにとって閉ざされていない世界を<sup>訳註6</sup>、私たちは、世界にもとづいては把握されえない自己の自由の意識において、踏み越える。

そのことを洞察する者や、世界についての思考においてこれらの限界にぶつかる者にとっては、世界は、いわば浮動する<sup>訳註7</sup>。

神による世界の創造の思想はそのとき、象徴であり、知識ではない。世界の創造の思想においては、深淵が開かれており、この深淵において、私たちは、世界についてのあらゆる知識と行為とともに<sup>フェアシュルンゲン</sup>飲みこまれるが、同時に自己が<sup>ゲボルゲン</sup>護られていると感じる。

しかし、この世界の創造の思想は、象徴的性格が固守されるという条件においてのみ、自らの真理を持つ。[世界の創造の]思想は、象徴であるから、私たちの世界の認識の領面においてあるわけではない。象徴的な思想は、創造の思想における無知の照明として、考え抜かれる。例えば、以下のようにである：

世界の創造は、世界における事象ではない。世界[が創造される]以前は、時間、空間、物質は、存在しなかった。しかし、私たちは、あらゆる表象作用によって世界の存在へと結びつけられているから、以前に[も]時間が存在したということや以前に[も]何かが存在したということ、思考せざるをえない。しかし、この私たちの結びつきを、私たちは認識することができる。私たちは、象徴を、——自己矛盾することを意識的に述べるという、ほかならぬそ

のことによって——、確証のよりどころとして、持つ。神は世界を創造した、——しかし、「創造した」という言葉によって、私たちは、時間的な事象を述べてはおらず、命題の意味に矛盾する。神は無から世界を創造した、——しかし、「何か」であるかのように、私たちは、無をあつかい、同様に命題の意味に矛盾する。

世界の創造の思想の象徴において思考されることは、<sup>フォーアガング</sup>「事象」ではない。(これを、<sup>フィグツィオーネ</sup>「虚構」においては、見ることもできるとしても。)世界の創造の思想の象徴において意図<sup>グマイント</sup>されていることは、決して、私たちによっては、ふさわしく<sup>グマイント</sup>思念されてあることができない。というのは、それは、私たちの表象能力と思考能力の範囲外にあるからである。

\*

いまや、世界の創造の思想の象徴は、私たち自身の本質の意識<sup>訳註8</sup>にとって、決定的な意味を有する。両根本思想は、——世界は<sup>エーヴィヒカイト</sup>永遠の存在である、世界は<sup>グシャッフエンザイン</sup>創造の存在である、という、たがいに争うこれらの両象徴は——、私たち自身の由来についての問いに、全く別様に答える。世界が永遠であるならば、人間は、世界において世界からして発生し、世界の産物である。世界が創造されているならば、人間は、それ自体、直接、神によって創造されており<sup>訳註9</sup>、確かに、身体<sup>グマイント</sup>の点では、また、身体<sup>グマイント</sup>の物理的、心理的な機能に関しては、世界の産物であるが、しかし、本質<sup>グマイント</sup>の点では、世界の外側にあるかのようなのである。

世界が創造されているように、私たちは創造されているかのようなのであるが、しかし、世界によってではない。生命のある身体としては、私たちは、世界の創造の一部である。自由としては、私たちは、直接、神によっている<sup>訳註10</sup>。それゆえ、私たちは、世界においてありながら同時に、ほかのところ<sup>グマイント</sup>に由来する。私たちは、私たちが世界において見いだすが、やはり、この世界によるのみで

はない<sup>歌註1</sup>。

しかし、そのことを、——私たちが自らを、心理学という科学によって、自らの様々な現象に関して、認識するような意味では——、私たちは、同様に見抜かない。すなわち、私たちは、そのことを知らない。

私たちは、どこに自己が由来したのかを、把握することができるならば、人間であることをやめるであろう。私たちは、私たちが人間であるという意識において、限界に触れることができるだけである。人間であることは、完成されていないことであり、完成されえないことである。私たちは、時間のなかで生きている。すなわち、私たちは、決して完成しておらず、求め試みる。永遠に存在するところのものと、私たちが自己の行為において永遠にそれであるところのものを、私たちは、決して知らず、それ[ら]は、暗号においてや、比喩において、鏡像において、現前する。世界の創造の思想の象徴においても、そうである。

世界の創造の思想は、知識をそれ[ら]においては許さないという、ほかならぬそのことによって、私たちを呼び覚ます。世界の創造の思想は、深みを指し示す。この深みにおいて、世界の創造の思想は、私たちの由来を隠し持つ。私たちが何によって生成したのかについての知識<sup>ヴィッセン</sup>は、——私たちがいあわせたかのように、私たちの創造に与り知ることは<sup>ミットヴィッサーシャフト</sup> <sup>歌註12</sup>——、私たちが時間のなかで人間であることの動き<sup>ベヴェーグUNG</sup>を止める。事態がどのようであったのかや事態がどのように成ったのか<sup>ゲシャエ</sup>という、創造という事象に関する知識は、[もしそうしたものがあれば、]完成された性格を有する知識であろう。私たちは、私たちが何であるのかを知るであろうし、もはや生成する必要がないであろう<sup>歌註13</sup>。〈以前〉が十全に完全に明白になれば、〈以後〉はもはや存在しない。(〈以後〉によって〈以前〉は初めて明らかになるに違いないのだが。) 私たちは、もはや私たちの状況の有する様々な可能性において生きてはおらず、それらを見通し、支配し、そのことによってなくしてしまっているであろう。すべてが開



示されている<sup>訳註14</sup>であろう。<sup>ワーアシュプレンク</sup>始まりの知識によって、私たちは同時に、私たちが人間であることの<sup>エンゾ</sup>終わりにいるであろう。私たちは、私たちの知識の様々な様態によって、ある別の、私たちにはいまは表象もされえない存在の知識と思考の能力に、いたっており、そのことによって、別の存在になっているであろう。私たちは、もはや人間ではないであろう。

\*

しかし、私たちは、人間であるゆえに、すなわち、実現の途上にあり、それにおいて、自らが本来あるところのものを、初めて経験するゆえに、以下の要求を私たちに立てるように思われる状況にあることを見いだす：

私たちがそれをいわば手にいれるかのように、世界の全体を空しく認識の対象にせず、世界において、無限なものへと、探求すること。

世界を、<sup>トタルヴィッセン</sup>全体知だと勘違いされたものにもとづいて、説明せず、世界における<sup>オリエンテールリンクスヴィッセン</sup>定直し方向づける知識を持つこと。

最大限の可能な知識によって、無知を把握すること。

〈いま〉と〈ここ〉での自己の歴史的な実現に甘んじること。

絶えずそれらによって襲われながら、いかなる世界の存在においても最終の<sup>ゲニューグ</sup>満足を見いださせない<sup>ウンルヘ</sup>不穩においてありつづけることによって、様々な限界を意識すること。

自己の実現それ自体によって、超越者への関係を獲得すること。

というのは、私たちの本質の一部であるのは、世界にもとづいては理解されず、あらゆる世界の存在に対して立ちうるような何か、私たちにおいては存在する、ということだからである。私たちは、世界において、ほかのところにも由来するかぎり、世界において、世界を超え出た課題を持つ。

\*

私たち人間に可能なあらゆるものにとって決定的でありつづけるのは、世界が存在し、私たち〔人間〕がそれにおいて存在する、という謎を、照明することであるが、覆い隠すことではない。

リグ・ヴェーダの詩人以来、私たちは、確かに、世界における強力な認識を獲得した。私たちは、そのことによって、無知の知における明らかさを高めた。しかし、決定的な点においては、私たちは、一步も先には進んでいない<sup>訳註15</sup>。

その一つの包括的な謎において、数千年にわたる思想家たちに出会うことと同様に、そのいにしへの詩人に出会うことは、無知の深みにおいて、私たちの人間の共同に活気を与える。

この謎を、私たちの現実の言葉の内実によって、満たすことが、私たちの歴史的な生である。しかし、この謎を暴いた〔としたら、その〕ことは、私たちに可能なものを逃させる<sup>シメイン</sup>仮象の知識の錯覚であるか、私たち人間があるのとは別の存在へと私たち〔人間〕を変化させることを意味する真理であろう。

---

\* 訳者註記：本稿は、Karl Jaspers: „Der Welterschöpfungsgedanke“ In: *Merkur. Deutsche Zeitschrift für europäisches Denken*. Jahrgang 6, Heft 51. Stuttgart (Klett-Cotta Verlag) 1952, S. 401-407 の全訳である。邦訳に、カール・ヤスパース「世界創造の思想」重田英世訳、『哲学と世界』所収、理想社、1968年、103 - 116 頁がある（底本は、Karl Jaspers: „Der Welterschöpfungsgedanke“ In: *Philosophie und Welt. Reden und Aufsätze*. München (Piper Verlag) 1958, S. 139-147)。〈 〉は語句の区切りの明確化のために訳者が付加したもの。〔 〕内は訳者による補足。なお、訳文の修正にさいし、道下拓哉、逢坂暁乃両氏の助言を受けた。感謝申し上げます。

<sup>訳註1</sup> Vgl. 「宇宙開闢の歌」辻直四郎訳、『リグ・ヴェーダ賛歌』所収、岩波文庫、1970年、

322 - 324 頁。

訳註2 Ursprung、起源。

訳註3 Vgl. Otto Strauß: Indische Philosophie. München (Reinhardt Verlag) 1924, S. 27.

訳註4 Immanuel Kant: *Kritik der reinen Vernunft*. B 641

訳註5 Vgl. DK 22 B 30 (『ソクラテス以前哲学者断片集』内山勝利編、第 I 分冊、岩波書店、1996 年、317 頁)

訳註6 「世界は、創造されたもの、つまり被造物として閉ざされておらず、私たちの認識にとって果てしないものであり、その根底へと開かれて超越者においてある」(Karl Jaspers: „Antwort von Karl Jaspers: Von der biblischen Religion“ In: *Die Wandlung. Eine Monatsschrift*. Jahrgang 1, Heft 5. Heidelberg (Carl Winter Verlag) 1946, S. 411 (カール・ヤスパース「回答：聖書宗教について」岡田聡訳、『哲学世界』第 44 号所収、早稲田大学大学院文学研究科人文科学専攻哲学コース、2021 年、77 頁))。

訳註7 「創造の思想は、世界の全体を浮動させる」(K. Jaspers, *ibid.*, S. 408 (ヤスパース、同上、71 頁))。

訳註8 Bewußtsein、自覚。

訳註9 「実存する単独者としての人間は、世界における自由を、神によって創造されていることとして、獲得する」(K. Jaspers, *ibid.* (ヤスパース、同上))。

訳註10 「西洋のもといとされた聖書のゆるぎない権威によって、生そのもののあらゆる矛盾の典型がしめされ、そのことによって、自己の自由な行為において自己が神によって贈り与えられることを知っている人間の、[一方では] あらゆる可能性に、[他方では] 思い上がりとの絶えまない闘いに、開かれることは、あたかも西洋の運命であったかのようである」(K. Jaspers, *ibid.*, S. 411 (ヤスパース、同上、76 頁))。「自由にかんしては、私は、自身によってではなく、超越者によって自由であることを、知っている。本来的な自由は、超越的なものと結びついていることを、知っている。自由にかんしては、私は、自身に贈り与えられる。自身にもとづいているという事態を、私は神に負っている」(K. Jaspers, *ibid.*, S. 412 (ヤスパース、同上、78 頁))。

訳註11 「人間は、<sup>トランスツェンデント</sup>超越神への結びつきにおいて、また、その結びつきによってのみ、あらゆる世界から独立している」(K. Jaspers, *ibid.* (ヤスパース、同上))。

訳註12 Vgl. Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling: „Die Weltalter. Erstes Buch“ In: Karl Friedrich

---

August Schelling (Hg.): *Friedrich Wilhelm Joseph von Schellings sämtliche Werke*. Abt. 1, Bd. 8, Stuttgart / Augsburg (J. G. Cotta'scher Verlag) 1861, S. 200; K. Jaspers. *Philosophie*. Bd. 3. 4. Aufl. Berlin u. a. (Springer Verlag) 1932, S. 209

訳註13 「人間であることは、人間になることである」(K. Jaspers: *Einführung in die Philosophie*. Zürich (Artemis Verlag) 1950, S. 70)。

訳註14 offenbar、啓示されている。

訳註15 「哲学は実際に、科学とちがひ、進歩の過程という性格を、持たない。確かに、私たちは、ギリシアの医師、ヒポクラテスより、はるかに進んでいる。[しかし、] 私たちは、プラトンより進んでいるとは、まず言えないであろう」(K. Jaspers, *ibid.*, S. 9)。